広島大学附属三原学校園研究紀要　第２集　2012　pp. 91-98

音　楽　科

習得したことを自らの表現に生かせる音楽科の学習(2)

―「ことば」に焦点をあてた音楽表現の工夫を中心に―

大　橋　美　代　子

１，はじめに

昨年度の研究では，生涯にわたって音楽に親しみ，音楽を自らの生活に生かしたり豊かにしたりできる態度を育むことを目的に，音楽科で習得した知識・技能をいかに「生きる力」として子どもたちに身につけさせるかを大きなテーマとして進めていった。この研究を通して，具体的方策のもと，単発で習得させるのではなく，領域（鑑賞と表現）相互を関連させたことで，子どもたちが興味をもって学習をすすめることができた。また，習得したことを生かしたり，深化させたりしながら自らの表現活動を進めることができた。小学校学習指導要領解説音楽編に明記されている共通事項の音楽的要素は，将来にわたって子どもたちにとって「生きる力」として必要である。そのため習得したことを自らの表現に生かす経験を意図的に仕組みながら，学年に応じた単元を設定することが必要であることがわかった。これは一定の成果であったと言える。

しかし，教師が事前に表現する場面を設定したうえでの実践だったため，子どもたちに「自分たちでつくりあげた」という達成感を十分に味わわせることができなかった。今回はそこに課題意識をもった。子どもたちが技能や知識を生きる力として表現するためには，実感を伴った学習の工夫が必要となる。つまり，自分自身が「なるほど！」「ここでこう表現するからこうなるのだ！」という音楽的な価値づけを行うことが，その後の意欲につながると考えたからである。

これらの課題を解決するため，今回は新たに「ことば」に焦点をあてた表現の工夫を行うことで，子どもたちが実感を伴いながら音楽的な価値づけを行い，さらに習得したことを「生きる力」として活用できるようにしていくこととした。

ではここからは，なぜ音や音色ではなく，あえて「ことば」に今回焦点をあてようとしたかを述べていく。

まず１つ目は小学校学習指導要領解説の中で，言語の充実が唱えられているという点からである。小学校学習指導要領解説の「１　改訂の経緯」の中に，子どもの思考力・判断力・表現力等を育むための手立てとして「言語活動の充実」について明記されている[1)]。これは国語科だけではなく，あらゆる教科・領域で貫かれている改善の視点である。「小学校学習指導要領の解説と展開音楽編」の中にも「書き言葉や話し言葉による表現を通して，知識・技能を活用する学習活動を各教科で行い，言語の能力を高めることが必要。」[2)]とある。また同時に「言語は，論理や思考といった知的活動ばかりでなく，コミュニケーションや感性の基盤である。」[3)]とも明記されており，感性を重視している音楽科教育の中でも，言語を育む必要があることがわかる。

さらに，「音楽科は，本来，自分の感じ方や考え方を音や音楽で表現することが中心となる学習である。また合唱や合奏，グループによる音楽づくりなど集団による活動では，音や音楽を通して，友達と伝え合い，共感する喜びを味わうことができる。」[4)]ともある。このようなことから，自分の感じたことや考えたことを「ことば」を手掛かりにしながら伝え合うことで，さらに表現の幅や質を深めることができるのである。

２つ目は，歌詞に対して敏感に反応できる力を

育てたいからである。音楽の主領域である表現の中に，歌唱表現がある。単にメロディーや旋律から音楽の曲想や雰囲気などを思い浮かべようとする子どもたちだが，昔から歌い継がれている曲には日本語独特の言い回しや歌詞の美しさが散りばめられている。現代の子どもたちは歌詞の中の「ことば」を意識しながら歌ったり味わったりすることができているだろうか。多種多様な音や音楽に囲まれているが故に軽薄になっていると思われる。やはり，音楽を形づくっている要素の大切な１つとして「歌詞（ことば）」にもっと敏感にならなければならいないと考える。

以上の理由から，言語（ここ以降は「歌詞やことば」と言いかえる。）に焦点を絞ることで，知識・技能を身につけさせやすくし，自らの表現に確実につなげさせることができると考える。同時に他者と「ことば」によってコミュニケーションをとることで，お互いの思いを伝え合い，練り合いながら，子どもたちの実感を伴った表現の工夫ができるようにしていきたい。そこで今回のサブテーマを設定した。

２，研究の仮説とその具体的方策

今回の研究を推進していくにあたり，次のような仮説をたててすすめていく。

【仮説】

歌詞やことばに焦点をあて，他者とともに思いや考えを交流し合いながら音楽表現を工夫させることは，表現の幅がより広がりやすくなり，習得したことを自らの音楽表現に生かすことができるだろう。

この研究仮説を具現化するために，次のような具体的方策を考えた。そして，仮説が有効だったかどうかを子どもたちの活動の様子や，出来上がった作品，実際の子どもたちの表現などをもとに検証することで，本研究の有効性を明らかにしていく。

【具体的方策】

① 単元の流れを習得場面と活用場面に分けることで，子どもたちが達成感をもって活動に取り組むことができるようにする

共通事項の要素の中から「強弱」を中心に習得させ，表現の工夫を活用場面で行う。まず習得場面では，教科書の中の教材曲を使いながら主に「強弱」について学習する。そして強弱を生かしながら具体的にどのように歌うかを試しながらすすめていく。しかし，その教材曲の習得のみで終わらず，「オリジナルの歌詞をつくってそれを歌で表現し，聴いている人に伝える」というさらなる活用場面を設定し，習得したことが表現として生かせるようにする。ここでは実感を伴った表現活動にするために，「１年生合同発表会」をゴールとして設定し，「グループで表現をつくりあげて発表する」という見通しをもたせ，学習意欲を高める。

② 表現の工夫をする際，歌詞やことばに焦点をあてる

先ほども述べたように音や旋律，リズムなどではなく，歌詞やことばに焦って学習を進めることで，より多くのイメージや音楽的な発見が見つけやすいようにする。また，幼稚園との連携の中で，紙芝居や絵本などの挿絵からイメージし，歌唱表現につなげていった経験をふまえ，発達段階に応じ，今回は「わかりやすい歌詞」を手掛かりに表現することができるようにする。

そこで，表現を工夫する際，「歌詞づくり」と「歌い方の工夫」の２つの場面を通して行う。

③ よりよい音楽表現になるよう，話し合いの手順を明確にする。

いきなりグループで話し合いをさせるのではなく，まずは個人で感じたことや考えたことをまとめさせ，その後グループ内で交流させるように手順を明確にする。そうすることで，自分自身の考えや思いを持つことができ，その後の話し合いで

自分にはないアイデアや感じ方に触れることができ，さらによりよい表現方法の工夫を模索することができると考えるからである。さらにその表現を学級全体，学年全体へと広げていく。その際，ここでも「ことば」を意識させ，自分の考えやアイデアを書いたり話したりしながらお互いにコミュニケーションをとらせていく。

3，実践例

(1) 単元

「ようすをおもいうかべよう」

(2) 授業実施学年

第1学年1組

(3) 授業実施時期

10月～11月

(4) 題材について

本題材では，子どもたちが曲を鑑賞したり，歌ったりする際，歌詞や曲想のイメージや内容を自分なりに感じとり，想像を膨らませることで，自らの表現に生かすことができるようにしていく。具体的には，歌詞や曲の感じからどのように歌ったらよいかを考えさせ，強弱をつけたり，やさしく歌ったり，はきはき歌ったりと具体的な工夫をさせることで，曲に合った歌い方に気づき，表現することができる力を養う。さらに，友だちと思いや考えを交流し合い，よりよい表現になるために練り合うという創造的思考力を発揮させる場面を設定することで，表現を工夫する楽しさや喜びを味わわせていく。

(5) 児童について

本学級の子どもたちは音楽が大好きで，学校生活の中でも曲に合わせて体を動かしたり，友だちと楽しみながら歌ったりする姿が見られる。しかし大きな声で元気よく歌うことはできるが，歌詞の内容を想像し，イメージを膨らませることで，自らの表現に生かすことまではできていない。また子どもたちの様子から，歌詞よりも，聴いた曲の感じ（弾む，ゆるやか，静かなど）を手がかりにして表現することが多く，歌詞の内容と合わない歌声になっていることも少なくない。聴くことで曲の感じをつかむことはできるが，歌詞の言葉からイメージを膨らませることが未熟で，強弱をつけるなど，具体的な歌い方の工夫も十分ではない。

(6) 指導にあたって

まず教材曲「おどるこねこ」では，曲名を伏せて曲全体の感じを味わいながら鑑賞させる。その後，ねこが踊る様子を強弱や音色を手がかりにしながら聴いたり身体表現させたりすることで，場面の様子や変化を感じとらせる。そして，教材曲「はるなつあきふゆ」では，各季節のイメージを言葉で出し合ったり，色で表現させたりすることで，歌詞の内容につなげていく。本時は，各グループでつくった歌詞をもとにイメージを膨らませ，お互いの考えを出し合いながら歌い方の工夫をさせる。特に，歌詞の中の「ことば」に合った歌い方の工夫に着目させ，「ふわふわという言葉があるからやさしく歌おう」「イルカの様子がわかるように強く歌おう」などの意見をとりあげ，具体的な歌い方に生かせる工夫を考えさせ，表現させていく。

(7) 題材の目標について

○　歌詞の表す情景に関心をもって歌ったり，場面の様子を思い浮かべながら聴いたりする学習に楽しく取り組むことができるようにする。

○　歌詞の表す情景を想像したり強弱をつけたりして，曲に合った歌い方を工夫することができるようにする。

○　歌詞の内容や楽曲の気分を感じ取り，それらを生かしながら歌うことができるようにする。

○　楽曲の気分の変化を感じ取ったり，場面の様子を想像したりしながら聴くことができるようにする。

(8) 学習計画

第１次　場面の様子や感じが変わるところに気をつけてきこう・・・・・・・・・１時間
第２次　歌詞を大切にして歌おう・・・・５時間
・四季のイメージを出し合おう（１時間）
・歌詞から想像を膨らませ歌ってみよう（１時間）
・自分たちで歌詞をつくり，歌い方の工夫をしよう（３時間）
第３次　発表会をしよう・・・・・・・・１時間

(9) 学習の主な流れ

第１次「おどるこねこ」の鑑賞では，曲を聴いて感じたことや登場人物の様子などをことばで自由に伝え合った。その際，「なぜ，そう思ったの」の聞き返すことで「音楽がすごくはやくなったから」「ゆっくりおどっている感じにきこえたから」「いきなり音が大きくなったから，犬とねこがけんかしたみたい」など，要素にかかわる発言を引き出すことができた。子どもたちは以下のような意見を発表した。

T：この曲を聴いてどうだった？
P1：おもしろい。
P2：にぎやかだった。
T：そうか。じゃあ最初から最後までずっと同じだった？
P3：ちがう。とちゅうでけんかがはじまったよ。
T：なぜ，そう思ったの？
P3：だって音が大きくなったから。
P4：いきなり大きくなるから突然けんかがはじまったかんじがしたよ。
P5：犬が怒ったみたい。
～途中省略～
T：じゃあ，音が小さいところもあった？
P6：小さくてゆっくりな音楽だからみんなで踊っているみたい。

このように，この鑑賞では「強弱」にしぼって子どもたちの感想をまとめた。

第２次は「はるなつあきふゆ」の教材曲で「強弱」について習得させていく場面である。子どもたちは，春夏秋冬のイメージを交流したり，その季節のイメージに合うように歌ったり，季節を対比しながら聴き比べたりしながらそれぞれの季節に合った歌い方の工夫を考えた。

さらにその後，習得した知識や技能を生かすために活用場面を仕組んだ。グループごとに好きな季節を選び，その季節に合ったオリジナルの歌詞をつくり，聴いている人に伝わるような歌い方を工夫していった。そして，グループの仲間同士で思いや考えを交流し合いながら１つの音楽をつくりあげていった。

第３次では，「１年生合同発表会」を開き，できあがった表現を学年全体で発表し合い，自分たちの音楽表現の良さを感じたり，自分たちにはない表現の工夫を見つけたりすることで，達成感やみんなでつくる楽しさを味わわせることができた。

４，授業の実際

【具体的方策①の実際】

① 単元の流れを習得場面と活用場面に分けることで，子どもたちが達成感をもって活動に取り組むことができるようにする

第２次では，習得と活用の２つの場面に分けて，学習を進めていくこととした。

まず，習得場面では，教材曲での四季のイメージを大切にし，「自分たちはこの曲をどのように歌うか」をワークシートに書いて交流し合った。

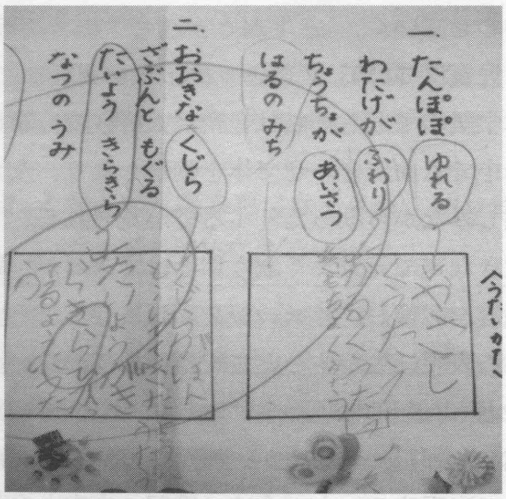

図１　自分の考えを書いたワークシート

この場面では特に，「強弱」を意識しながら歌うことで，実際の曲の感じに影響がでることを習得させることができた。

ワークシートにもあるように，子どもたちは，歌詞からイメージを膨らませ，「○○ということばから～のように歌いたい」と自分なりの考えをもつことができた。一人ひとりが強弱や歌い方を考え，それを歌声で表現することができた。

その後の活用場面では，習得場面で学んだ知識をもとにオリジナルの歌詞を考え，グループで1つの音楽を表現していくこととした。達成感をもって活動に取り組めるよう，季節もあえて限定せず，好きな季節を選ばせ，自由に歌詞を考えさせていった。同じ季節ではあっても，歌詞の内容が違うため，意欲をもって楽しみながら表現の工夫を行っていた。また，習得場面で，「強弱」を具体的にどのようにつければ歌声に影響するかを学習していたため，表現の工夫の幅が広がっていった。

【具体的方策②の実際】

② 表現の工夫をする際，歌詞やことばに焦点をあてる

〈Ⅰ歌詞づくりの場面〉

教材曲の歌詞に，「たんぽぽ，ふわふわ」や「イルカ，ざぶん」「たいよう，ぎらぎら」など季節のワードやそれを表す擬音語や擬態語があった。子どもたちはそこからイメージを膨らませたり，その場面を想像したり，実際にその歌い方で歌ってみたりすることで，「強弱」を使って表現に変化をもたせることに納得することができたようだった。そのため，活用場面のオリジナルの歌詞づくりの際にも，1年生という語彙力も未発達な段階にもかかわらず，今までの経験や体験を生かし，季節のイメージに合った歌詞を考えることができていた。同じ季節でも選択した題材によって場面のイメージが変わっていることが聴き合いの中でもよくわかったようだ。

きせつ（なつ） 大きな　イルカ 大きな　ジャンプ きれいな　うみだね なつのうみ

きせつ（ふゆ） ちらちら　ゆきが ふって　くるよ ながれぼし　きらきら ふゆのやま

[グループごとに考えたオリジナルの歌詞]

〈Ⅱ歌い方を工夫する場面〉

歌詞が確定した後は，それをどのように歌いたいか表現方法の工夫を考えさせていった。グループで意見を交流しながら歌詞からイメージをふくらませ，具体的な歌い方につなげていった。いきなり話し合うのではなく，大きな模造紙に書き込みながら意見を収束させていった。

図2　歌い方の工夫をもとに練習している様子

ことばだけではなく，身体表現をしたり，絵で場面の様子を付け加えたりするなど，工夫の幅が広がっていった。

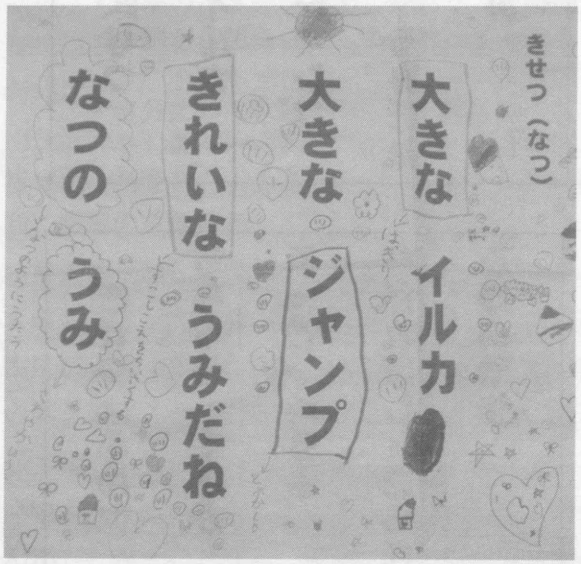

図３　グループで工夫を書き込んだ模造紙

【具体的方策③の実際】

③　よりよい音楽表現になるよう，話し合いの手順を明確にする。

活用場面のオリジナルの歌詞づくりからグループ学習を中心に学習をすすめていった。グループで交流するためにはまず，自分の意見や考えを確立させる必要がある。そのため，オリジナルの歌詞をもとに個々がワークシートに自分の意見を書き込み，それをもとに話し合いをさせていった。こうすることで，いきなり話し合わせるよりも根拠が明らかになっており，一人ひとりが自信をもって自分の考えを伝えることができていた。

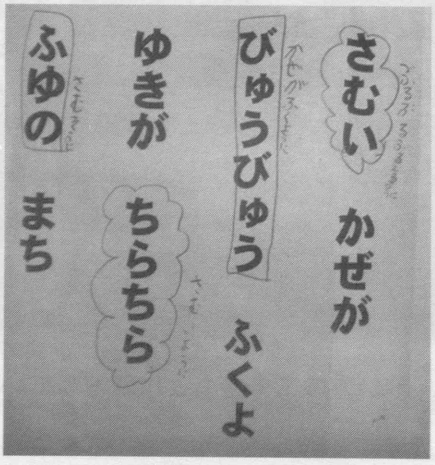

図４　個が書いたワークシート

最後の学年発表会では，それぞれの表現を見合う中で，自分たちにはない良さや表現の工夫を見つけることができた。

図５　発表会でグループごとに歌っている様子

５，結果と考察

(1) 具体的方策①について

①　単元の流れを習得場面と活用場面に分けることで，子どもたちが達成感をもって活動に取り組むことができるようにする

今回は習得場面と活用場面を明確に分け，知識として得た力を実際に生かすことができるよう単元を組んだ。習得場面の中で，身につけさせたい音楽的要素である「強弱」について絞って学習をすすめていったため，実感をともなった学びにすることができた。くりかえし歌っていくうちに子どもたちの中から「４番（冬）を歌ったら本当に寒くなったよ」という感想がでるようになった。知識や技能が身についたと感じることができた。その後，活用場面では歌詞づくりから子どもたちが進めていったのだが，強弱をふくめた歌い方の工夫について楽しみながら活動していた。教科書にある教材曲の枠をこえ，自分たちで考え，試しながら音楽をつくっていくことに楽しさや達成感を味わうことができた。

〈子どものふりかえりより〉
・きょうのはっぴょうかいは，すごく「はるなつあきふゆ」にあったイメージが，１くみさんも２くみさんもひょうげんできていました。いろんなきせつにあったこえの大きさがあってとてもよかったです。

(2) 具体的方策②について

② 表現の工夫をする際，歌詞やことばに焦点をあてる

歌詞をつくらせたり，どのように歌いたいかを考えさせたりする際に，「ことば」にいかに寄り添わせるかが大きな課題であった。旋律などの他の音楽的要素ではなく，主に「強弱」に絞ったことで，子どもたちが「何をどのようにすればよいか」という見通しをよりもつことができた為，効果があったと思われる。また，歌詞を考えたり，そこからイメージを膨らませたりするなど，「ことば」を意識づけたことで，個々の思考の流れや作品が出来上がるまでの過程，さらにはグループが考えた表現の工夫が明確になった。音楽科における「ことば」の習得や活用も，他教科同様に必要であることがわかった。

しかし，発達段階からも「このように歌いたい」という思いを言語化することには限度があり，十分にお互いの思いを伝え合うことができたとは言えない状況もあった。その為，今後も言語力をさらに磨いていく必要がある。

また，この学習を行う前と後の子どもたちの歌声の変化を音声で録音してみた。すると次のような結果が明らかになった。

〈学習前〉
・冒頭の部分からしっかり息をすって大きな声で歌っている。
・曲の山場はあるが，最初から最後まで同じ声の大きさで歌っている。
・歌詞の内容を意識しながら歌っていない。

〈学習後〉
・声を出しながらも表情をつけたり，その言葉だけをはっきり歌ったりする子どもがふえた。
・曲の中でどこに山場があるか，歌詞をもとに考えている。
・最初から最後まで同じ調子で歌う子どもが少なくなった。

これらの結果からも，歌詞やその状況，場面の様子などを意識しながら歌おうとする姿が見られるようになったことがわかる。

しかし，すべての子どもがそのように意識しながら歌っているとは言えない。今後も引き続き，歌詞やことばを意識させるような声かけや経験を積み重ねていかなければならない

(3) 具体的方策③について

③ よりよい音楽表現になるよう，話し合いの手順を明確にする。

今回は，手順をふみながら話し合い活動を仕組んでいった。いきなり交流させるではなく，４人で話し合う前に，個々がまず自分の考えを持ち，ワークシートにまとめておいたため，グループの話し合いがスムーズに進んだ。しかし，４・５人のグループで活動したことはあるものの，１つのものを話し合いながらつくりあげる経験が初めてであった。そのため，時間がかかったり，意見がまとまらずけんかになってしまったりするグループもあった。この話し合いの手順を生かしながら，今後はコミュニケーションのとり方や折り合いのつけ方などを同時に体感させていく。

また内容面では，グループで話し合わせることで，個の考えより質が深まり，さらに良い表現になっていた。このようなグループ活動の良さも子どもたちに伝えていく必要がある。

図６　思いを伝え合いながらまとめていく様子

６，終わりに

今回の研究は音楽科教育の中で「ことば」に焦点をあて，他者とともに思いや考えを交流し合いながら音楽表現を工夫させる活動を中心に据え進めていった。「ことば」は，人と人とが自らの思いを伝え合うために必要不可欠なものであり，重要なコミュニケーションツールの一つである。音楽科という一見感覚で活動する教科であっても実は「ことば」は大切な役割を果たすことが分かった。なぜなら習得したことを実際の表現活動の中で生かそうとする際には，音のみでは伝わらないことが多く，発達段階からも「ことば」を手掛かりにしたり，音楽的価値づけの際の根拠にしたりする場面が多かったからである。歌詞からその情景を掘り下げていったり，自分の考えをワークシートに書くことで確認したり，お互いの考えを交流したりするのも全て「ことば」であり，意欲的に音楽活動を行うことができたといえる。だからこそ，習得した知識や技能を自らの表現に生かすことができ，その意味では一定の効果があった。

とは言え，教科の特性からみると，音や音色など他の教科では扱うことが少ない要素とあえて組み合わせる必要があるとも感じた。今後はそれらの音楽的要素間のバランスや学年の系統性なども考慮しながら，効果的に習得したことが生きる力につながるような単元を開発していくことが課題である。

＜参考・引用文献＞

1)　文部科学省：「小学校学習指導要領解説（音楽編）」，pp. 1-2，p. 6，2008，東洋館出版社.
2)　安彦忠彦・坪能由紀子・伊野義博：「小学校学習指導要領の解説と展開　音楽編」，p. 66，2008，教育出版社.
3)　前掲書 2)，p. 66.
4)　前掲書 2)，p. 67.